

愛する

立原えりか



女性の美と文化を創る

と
朱鷺書房

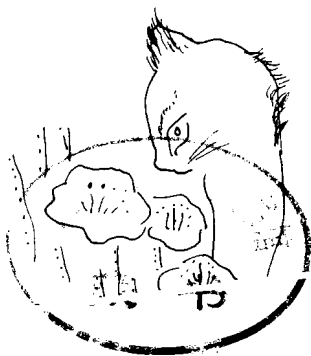
189891



日文 701746057

愛する

立原えりか



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

愛する

著者 * 立原えりか
発行者 * 小森 保彦

発行所 * 女性の美と文化を創る **朱鷺書房** と き

大阪市東淀川区西淡路町一―二二二
ビジネス新大阪／郵便番号五三三
電話〇六(三二三)三二九七

振替 大阪三六九九

東京都渋谷区神南一―二二一〇

皆川ビル／郵便番号一五〇

電話〇三(四六四)二九二二

印刷 * 第一印刷出版株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします。 © ERIKA TACHIHARA

(分) 0095 (製) 00901 (出) 5353

1977

●愛する

もくじ

忘れかけたものたちの唄	6
バスの少女	47
枯れたスマイレ	54
しけた先生	56
人形ものかたり	67
フジモト歯科医院	81
哀しい占い	86
純白の上はき	95
レイキャビクの窓	101
盛装したこみ収集車	112

夏の日のカンカサラ 120

ダンヒルのマツチ 135

サイパン島のともだち 143

魔女志願 153

カラスの馬 164

唇から真珠 175

愛する 183

あとがき 200

装幀・さし絵 佐野 昌了

忘れかけたものたちの唄

1

昔、といっても、ほんの二十年はかり前、年の暮れはもっと寒く、あわたたしかったようにおもいます。十二月の二十八日にもなると、家々の主婦たちは、白いかっぱう着に身をかためて、大掃除に精をたしました。障子を張り替え、ふすまを新しくして、ガラス窓から天井板まで、くまなく拭きあげたものです。小学生だった頃の私は、学校から帰ってくるとすぐ、母の手助けをさせられました。いらなくなった紙きれは、落ち葉といっしょに庭で燃やし、机のひきたしや、本棚のすみをあらため、廊下をみかきため、母か、「お

しまい」というまで、一年分のほこりを払わなければならぬものが、はてしなく出てくるのでした。

おもちもつきました。たいていの家が、土曜の午後や日曜日、男の人がいる日におもちつきをするので、リズムカルなきねの音が、あちこちからこだまして、きこえてきたものです。

子どもたちの遊び場になっている広場には、しめなわや松飾りを売る小父さんかやってきました。吹きさらしの場所で、小父さんはごうこうとたき火をたき、でも、あたたまっている暇ありません。人ひとか、次から次にやってきては、あわただしくしめなわをえらび、松飾りを買って行きます

こざっぱりとした玄関に、いかめしそうなしめなわと、こいみとりの松が飾られると、子どもたちはみんなはしゃいで、「お正月かくるんだ」と思うのでした。

母は、三十一日の夜まで働いていました。台所に並んだお重箱には、つきからつぎへとおせち料理かつめこまれ、これでおしまいかと思うと、まだ、黒豆を煮るにおいかしてきます。あすきも煮て、ごまめもこんぶも煮て、野菜もこんにやくも煮て、鍋たちは休むひまなく火にかけられ、台所中が、ことごとかたかたと、うたいつづけました。お雑煮のた

しをとり、年越しそはのおつゆを作りあげて、やっとカスの火かとまります。いったいとうして、こんなにたくさん煮なければならぬものがあるのか、ふしぎなくらいでした。

母や、母と同じ年ごろの女たちは、「せわしなくて、いやになるわ」とこぼしなから、せわしない年の暮れをいとおしみ、掃いたり拭いたり、煮たり焼いたりすることを、愛していたのかもしれませんが、北風に肩をすくめながら、買いものに走ることも、なくてはならない生活でした。

今の私は、その母と同じように、東京の片すみで、ちっほけな家を取りしきっています。ところがお正月か近づいても、大掃除はしないしおせち料理も作りません。乾ききらない洗濯ものをへやに吊り下げ、家中を閉めきったまま、年の暮れと新年を、外国で過ごしてしまったりします。旅に出してしまえば、年末の買いものに走りまわるあわただしさからも、どことなくしららしい、新年の町からものかれることかできるからと言いついて、去年も今年も、家にいませんでした。

二十年前の女たちのように、あわたたしささえいとおしんで、手なずけてしまうほとのおおらかさを、私はなくしてしまったのでしょうか。

お正月か近づいても、おもちつきの音は、そこからもきこえてきません。羽根つきの音

も、百人一首をよみあげるのとかな声もきこえません。たいていの子どもたちは、おせち料理やお雑煮や、家族たちか揃って笑いかわす元旦のうれしさよりも、お年たまをもらうことだけか、お正月のすはらしさかと思っています。

2

一月から二月にかけての星空か、一年中でいちばんみことです。こんなにたくさん星があつたのかと思うくらい、いくつもいくつもの星かまたたき、ふるえています。

でも、空か登んでいれはいるほど寒さはきひしいので、星座を探しに庭に出るときは、思いきり厚着をします。帽子をかぶり手袋をして、たるまさんのように、三十分も立ちつくして見ると、やっと、星たちの物語りかわかりはしめるのでした。

その夜も、星を見ていました。真夜中に近い時間で、家々のあかりはすっかり消えて、通りもしんとしていました。

体中かつめたくなつてしまつて、もつ部屋に入ろうかと出たときです。そこからか、声かきこえてきました。

「あつたかかつたわ、ねえ、お母さん」

「そうね、今日も無事にすぎたわ。お風呂にも入れたし、よかった」

「ほんとうね、よかったね」

あどけない子どもと、母親らしい人がかわしている声でした。銭湯に行った帰りなのでしょう。石けん箱と洗面器かふれあう音か、足音といっしょにきこえてきます。

あったかかった、という子どもたちの声も、よかった、という母親の声も、ほのほのとなごやかで、やさしい湯気のようにでした。

真夜中近くに銭湯へ行く母親は、働いているにちかいありません。八百屋のおかみさんかもしれないし、遠いところへつとめに出ているのかもしれない。子どもはきつとおとなしく、母親の仕事かすむのを待っているのでしょう。一日のおわりに、お母さんと子どもか、ゆっくりとしすんだお風呂は、安らぎにみちた、あたたかいものだったにちかいありません。

いたわりあっているふたりの想いか、声にこもっていました。あしたも精いっぱい働いて、手をつないでお風呂に入りにようという、ささやかなあたたかいのぞみか伝わってきました。いまの暮らしてはみちたりない、早く、お風呂つきの家に引越したいと、いらだっている母親には、あんなにのひやかな美しい声を出すことができないでしょう。

「ゆっくり帰ろうよ、お母さん」

「そうね あったかいものね」

また二人が言い、ふと、足音がとまりました。

「見て、ひしゃく星た」

子どもの声につられて、私も空を見上げました。

北斗七星か、きらきらしています。

昔むかし、口でりか続いた村で、病気の母親のために、ひとすくいの水をさがしに行った、女の子のひしゃくから生まれたのか、七つの星でした。井戸も池も、川も湖もかれはてた村に、水があるはずがありません。疲れはてて、倒れてしまった女の子は、気がついたとき、ひしゃくの中に、すんだ水が入っているのをみつけます。

水をのめば、病気がなおるとわかっているのに、母親はひしゃくの水を、「おまえかおのみ」と女の子にゆずり、女の子は、「わたしより母さんかのもので」とゆずります。そこへ見知らない老人かやってきて、「水を分けてくれ」とたのむと、二人はひしゃくを、こころよくさしだすのです。ひしゃくからは、七つのダイヤモンドが生まれて、空にのぼって行き、きらめく北斗七星になりました。水は、のんでものんでもへらなくなつて、村中

の人をすくいました。

銭湯帰りの母親と子とは、星物語りの主人公たちに、そっくりだったにちかいありません。

3

ハレンタインデイは、クリスマスと同じように、輸入されたお祭りです。キリスト教の信者でなくても、クリスマスにはモミの木を飾り、プレゼントを交換しあうように、ハレンタインかそんな人だったか知らなくても、ハレンタインの日には何をするか、たいていの少女たちか知っています。二月十四日、その日だけは、女性から、愛を告白してもいいのです。愛のことは、チョコレートにそえておくれ、相手かうけとってくれたら愛をうけいれたものとみなされます。

この日か近づく、チョコレート屋さんの前に、少女たちの行列かてきます。「I から M へ」とか、「スキです」とか「I LOVE YOU」とか、少女たちは好みの文字と言葉を、チョコレートにするしてもらうのです。チョコレート屋さんも大サーヒスで、せっせと、ハタクリームの文字を描き続けます。

思い通りのチョコレートを手に入れた少女たちは、みんな幸福そうて、若わかしいほ
おか、は、い、ろに「気づいています」あの少女たちの心には、ひとりずつ、りりしい王子さ
まか棲んでいるにちがいありません

何年か前の二月十四日、私もチョコレートを手にしていました。ハレンタインの日もは
しりの頃、チョコレートにネームを入れます」という、気のきいたサーヒスをし
てくれるチョコレート屋さんもなければ、チョコレートの種類も数えるほどでした。チョコ
レートといえは板チョコとウイスキーボンボンくらいだったような気がします。

高校生だった私には、ひみつの恋人がいました。三年生で仏文科志望の、すてきな男の
子でした。恋人といったところで、私か勝手にそう思っているだけで、学校へ行っても、
会えるわけではありません。一年生の私は、まれに、廊下で彼とすれちかい、校庭にいる
彼の姿を眺めることかてきたけでした。ほんのひとときでも目か合うと、それだけでみ
ちたりて、一日中しあわせな想いでいられたものです。もちろん彼は、私の想いに気づいて
いませんでした。それとてころか、勝手に恋人とよんでいる下級生がいることも、考えて
もみなかったてしょう。

「あのひとに、チョコレートをおうろう」と思いついたのは、一月のわりでした。真赤

な紙でつつんで、銀のリホンを結んで、小さいカードもそえて、カードに書く言葉も練習していました。「あなたが好き少女より」と、それだけ。

学校の帰り道やお休みの日、私は目を皿のようにして、チョコレートを探したものです。テパートにもお菓子屋さんにもマーケットにも雑貨屋さんのすみっこにも、チョコレートはありません。けれども、気に入りません。生まれてはじめての、愛の言葉をそえておくチョコレートは、ありきたりのものであつてはならなかったのです。私が彼に捧げるチョコレートは、世界でいちばんおいしくてきれいでなければなりません。その辺の子ともがかるものと同じであつてはならないのです。この世にふたつとはないチョコレートを、私はもとめたのでした。

思いとおりのものは、手に入りませんでした。さんざん探しまわったあけくに、スイス製のチョコレートを、私はえらびました。大好きな本か三冊も買えるほど高価でしたけれど、けちけちしてはいられません。

二月十四日の朝、私はときどきしなから学校に行きました。カバンの奥には、エーデルワイスのようをつけたチョコレートの小箱が、丹念につつんで入れてありました。

放課後になると、朝よりももっと胸をおとらせて、図書室にしのひこんだものです。恋